

保育教諭がもつ自閉スペクトラム症に対する顕在的および潜在的態度

関西福祉科学大学心理科学部 津田 恭 充
奈良教育大学教職開発講座 堀 田 千 絵

The explicit and implicit attitudes of nursery teachers toward autism spectrum disorder.

Department of Psychological Sciences, Kansai University of Welfare Sciences,

TSUDA, Hisamitsu

School of Professional Development in Education, Nara University of Education,

HOTTA, Chie

要 約

本研究では、自閉スペクトラム症（ASD）の教育や保育に携わっている保育教諭 60 名を対象に、ASD や定型発達児への顕在的態度と潜在的態度を調査した。接触仮説に基づき、保育教諭の ASD に対する態度はポジティブであると予測した。分析の結果、中間点と比較したとき、保育教諭の ASD に対する顕在的態度は全体的にポジティブであったが、潜在的態度はネガティブであった。定型発達児に対する態度と ASD に対する態度を比較したとき、28 項目中 10 項目で ASD に対する態度は定型発達児に対する態度よりも有意にネガティブであった一方で、ASD に対する態度のほうが有意にポジティブであったのは 3 項目であった。接触仮説からの仮説はごく一部が支持されたにとどまり、全体的に保育教諭の ASD に対する態度はネガティブであった。

【キー・ワード】自閉スペクトラム症, ステレオタイプ, 偏見, 潜在連合テスト, 接触仮説

Abstract

The study investigated explicit and implicit attitudes toward autism spectrum disorder (ASD) and children with typical development among 60 nursery teachers of ASD education and childcare. Based on the contact hypothesis, we predicted that the attitude of nursery teachers toward ASD was positive. The results revealed that the explicit attitude toward ASD was overall positive when compared with the midpoint (zero), whereas the implicit attitude was negative. Moreover, 10 out of 28 items exhibited significantly more negative explicit attitudes toward ASD than children with typical development. Further, 3 out of 28 items displayed significantly more positive explicit attitudes toward ASD than children with typical development. The results only partially

supported the hypotheses, which indicated that the attitudes of nursery teachers toward ASD were overall negative.

【Key words】 autism spectrum disorder, stereotype, prejudice, Implicit Association Test, contact hypothesis

問 題

日本では障害者差別解消法が2016年に施行され、(発達障害を含む)障害を理由とする差別が法的に禁止され、障害に対する態度や偏見および差別に関する研究が重要性を増している。心理学的観点から偏見を低減するための方法やその根拠となる理論がいくつか提案されているが、その代表が接触仮説(Allport, 1954)である。これは、偏見は知識の欠如が原因であり、相手との交流を通じて実際の姿を知ることで偏見を低減できるとする仮説である。ただし、接触によって常に偏見が低減されるかというそうではなく、接触が有効に機能するには条件がある。具体的には、地位の対等性、協同(目標の共有と協力)、社会的・制度的支持(法律や制度、規範による支持と強制)、情報を得たり親密な関係を築くのに十分な頻度・期間・内容を伴った接触などが重要であることが明らかにされている(北村・唐沢, 2018, pp.82-84)。特別支援学校教諭はそうでない者よりもASDとの接触経験が多いといえるが、実際に前者は後者よりもASDに対してポジティブな態度をもつことが報告されている(Chung et al., 2015, Flood et al., 2013, Olley et al., 1981)。日本ではそうした専門家を対象とした数量的研究は見当たらないが、類似した研究として田実(2007)がある。田実(2007)は、大学1年生を対象に自閉症に関する文献購読を1年間続けた結果、学生の「無理解的偏見性」の得点が低下したとしており、正確な知識を獲得することが無知に基づく偏見を低減させることを明らかにした。これらは接触仮説を間接的に支持するもので、ASDへの偏見の低減に接触や知識の獲得が有効であることを示唆している。

ただし、上述の研究はすべて質問紙調査を用いた自己報告に基づいているということに注意する必要がある。一般的に、人は特定の対象への態度を回答する際、社会的に望ましいとされる方向に回答をゆがめる傾向がある(Edwards, 1953)ためである。NHK(2019)が行った日本における障害に対する世論調査では、「自分自身に障害のある人への差別や偏見があると思うか」という質問に対して、「かなりある」と答えた人は3.3%、「ある程度ある」と答えた人は21.9%であった。一方、「今の日本の社会に障害のある人への差別や偏見があると思うか」という質問では、「かなりある」と答えた人は17.8%、「ある程度ある」と答えた人は59.5%で、自分自身に対する回答と日本社会に対する回答には乖離がみられた。これは電話調査であったため社会的望ましさのバイアスがより強く影響した可能性があるが、いずれにしても、このデータは障害に対する自分自身の態度を自己報告してもらうと社会的に望ましい方向に偏りがちであることを示唆している。このことから、障害への差別や偏見は改善されたようにみえても表面的なものにとどまっている可能性も考えられ、単なる自己報告にとどまらない広い視野での調査が必要である。ASDに焦点を当てた場合、社会全体を対象とした調査も重要であるが、教員のもつASDへの態度はASDへの介入の効果に影響を与える(McGregor &

Campbell, 2001) ことを考慮すると、ASD の教育や保育あるいは療育等に携わっている者を対象とした調査は特に重要であろう。

前述した社会的望ましさの影響を回避できる有望な方法が、Greenwald et al.(1998)の開発した潜在連合テスト (IAT: Implicit Association Test) である。IAT とは、単語の分類課題にかかる時間をミリ秒単位で測定することで、概念間の結びつき (連合) や、ある概念とそれに対する評価の結びつきの強さを調べる実験である。IAT は、その理論的背景や実験手法を熟知している者以外にはどのような反応がどのような結果につながるのかがわかりにくいため、社会的に望ましい結果を意図的に作り出すことが困難である。この特徴を生かし、偏見などの社会的望ましさのバイアスを回避する必要がある現象を研究するために IAT は広く活用されている。

こうした背景を踏まえ、本研究では、日本で ASD やその疑いのある子ども (以下、ASD 傾向児とする) の教育や保育に関わっている保育教諭がもつ ASD への態度を顕在・潜在の両面から明らかにすることを目的とする。接触仮説に基づけば、彼ら (彼女ら) は全体的には ASD に対してポジティブな態度を有すると考えられる。ASD 傾向児との関わりにストレスを抱くほど ASD 傾向児に対してネガティブな態度をもち、レジリエンスを有するほど ASD 傾向児に対してポジティブな態度をもつかもしれないが、彼ら (彼女ら) は専門家であるがゆえに顕在的にはネガティブな態度を表明しない可能性もあり、このことについて強い仮説はない。一方、潜在的には、ASD 傾向児との関わりにストレスを抱くほど ASD に対してネガティブな態度、レジリエンスを有するほど ASD に対してポジティブな態度をもつと考えられる。

方法

調査対象者

調査対象者は幼保連携型認定こども園で ASD 傾向児の教育や保育にあたっている保育教諭 60 名で、3 つの園で参加者を募った。参加者の属性の詳細は表 1 のとおりである。

表 1 調査対象者の属性の詳細

| | 所属 | <i>n</i> | <i>M</i> | <i>SD</i> | Min | Max |
|-------------------|----|----------|----------|-----------|-----|-----|
| 年齢 | A園 | 20 (1) | 37.10 | 13.15 | 21 | 64 |
| | B園 | 19 (3) | 39.56 | 12.53 | 21 | 57 |
| | C園 | 21 (2) | 38.38 | 13.75 | 21 | 61 |
| ASD傾向児の教育や保育の経験年数 | A園 | 20 (1) | 6.00 | 6.33 | 1 | 23 |
| | B園 | 19 (3) | 6.68 | 5.83 | 0 | 20 |
| | C園 | 21 (2) | 5.45 | 4.82 | 1 | 17 |

注) *n* の括弧内は男性の数を表す。「経験年数」の最小値である 0 は 1 年未満を意味する。

調査内容

デモグラフィック要因 年齢, 性別, ASD 傾向児の教育や保育に関わった経験年数 (以下, 経験年数と表記する) への回答を求めた。

ASD 傾向児および定型発達児に対する顕在的態度 林 (1978) による 20 組の形容詞に加え, 後述の ASD SC-IAT から対になる形容詞 8 組を取り出し, 計 28 組の形容詞対を用いて ASD 傾向児および定型発達児への印象を 7 段階の SD 法で評価してもらった。

ASD に対する潜在的態度 IAT から派生した実験である Single-Category IAT (SC-IAT; Karpinski & Steinman, 2006) を用いて ASD に対する潜在的態度を測定する ASD SC-IAT を新たに作成し実施した。ASD 語 (アスペルガー症候群, アスペルガー障害, 広汎性発達障害, 自閉スペクトラム症, 自閉症を「自閉症」に分類するよう教示) は教育や保育の現場で現在も用いられている用語を参考に著者らが選定した。快語 (美しい, 優れた, 元気な, すばらしい, かしこい, すてきな, 親しみやすい, うれしい, 正直な, しあわせな, 楽しい, 好ましい, 陽気な, 見事な, 快い, 華麗な, 正しいを「快」に分類するよう教示) および不快語 (痛ましい, ひどい, 間違っただ, うそつきな, 暗い, おろかな, 陰気な, 邪悪な, 不快な, おそろしい, 嫌いな, 気持ち悪い, 汚い, 劣った, いじわるな, 醜い, 不幸なを「不快」に分類するよう教示) は Karpinski & Steinman (2006) を参考に作成した。実験の手続きや得点の算出方法は Karpinski & Steinman (2006) に従った。得点が正の値であれば ASD への潜在的態度がポジティブ, 負の値であればネガティブであることを意味する。

ASD 傾向児との関わりにおけるストレスやレジリエンス 先行研究 (赤田, 2010; 堀田他, 2013; 川村他, 2015; 木曾, 2016; 西坂, 2002; 小原・武藤, 2005; 佐々木, 2019) を参考に, 著者らが 10 項目を作成した。調査対象者には, 「自閉スペクトラム症やその疑いのある子どもとの関わりについて, 以下のことをどの程度感じたり考えたりしていますか。それぞれ 1.まったくあてはまらない-5.非常にあてはまる のうちもっとも近いものをひとつ選んで○をつけてください。」という教示文にしたがって回答を求めた。

分析計画

本研究では具体性を重視し, 質問紙調査で得られたデータに関しては複数の項目の得点を合成せずに 1 項目ごとに分析を行う。この場合, 得られたデータにパラメトリック検定を適用可能であるかが不透明であるため, パラメトリック検定とノンパラメトリック検定を併用する。具体的な分析としては, ASD 傾向児に対する顕在的態度がネガティブなのかポジティブなのかを絶対的基準に基づいて調べるために, ニュートラルな態度を意味する中間点の 0 を基準とした 1 サンプルの t 検定および Wilcoxon の符号順位検定を実施する。定型発達児に対する態度についても同様の分析を行う。また, ASD 傾向児に対する顕在的態度と定型発達児に対する顕在的態度を相対的に比較するため, 対応のある t 検定および Wilcoxon の符号順位検定を実施する。加えて, ASD 傾向児との関わりにおけるストレスやレジリエンスと ASD 児に対する顕在的態度の関連を, 定型発達児への顕在的態度を制御変数とする Pearson の偏相関分析および Spearman の偏順位相関分析により検討する。同様にして, ASD に対する潜在的態度と ASD 傾向児との関わりにおけるストレスやレジリエンスの関連も調べ

る。

ASD SC-IAT の得点は反応時間に基づいており明らかに間隔尺度以上であるため、ASD SC-IAT のみを用いた分析ではパラメトリック検定を適用する。具体的には、ASD に対する潜在的態度がポジティブであるかネガティブであるかを、中間点である 0 を基準とした 1 サンプルの t 検定により検討する。

以上の分析は両側検定、有意水準を 5% として行う。ただし、複数の項目について同じ検定を繰り返す場合には第一種の過誤を避けるために BH 法 (Benjamini & Hochberg, 1995) を用いて有意確率を補正する。

倫理的配慮

調査・実験の内容と目的を園に説明し、事前に研究実施の了解を得た。調査対象者には、調査・実験への参加は任意でありいつでも中断できること、得られたデータは統計的に処理され個別のデータが取り上げられることはないことを十分に説明し同意を得たうえで実施した。本研究は第一著者の所属機関の研究倫理委員会の承認を得た。

結 果

ASD 傾向児に対する顕在的態度

表 2 は ASD 傾向児に対する顕在的態度をニュートラルから離れている順に並べたものである。28 項目中、有意にポジティブであったのは 16 項目、有意にネガティブであったのは 5 項目であった。

表 2 ASD 傾向児に対する顕在的態度の中間点との比較

| 項目 | M | SD | t | df | p | 対応のある t 検定 | | | Wilcoxon の符号順位検定 | | |
|-----------------|-------|------|-------|----|-------|------------|---------|---------|------------------|-------|------|
| | | | | | | 効果量 | | | W | p | 効果量 |
| | | | | | | Cohen's dz | 95%CI下限 | 95%CI上限 | | | |
| 2 人のわるい－人のよい | 0.97 | 1.01 | 7.24 | 57 | <0.01 | 0.94 | 0.63 | 1.25 | 588.0 | <0.01 | 0.98 |
| 25 うそつきな－正直な | 1.18 | 1.17 | 7.61 | 56 | <0.01 | 1.01 | 0.68 | 1.32 | 682.5 | <0.01 | 0.94 |
| 28 おろかな－かしこい | 0.73 | 1.10 | 5.11 | 58 | <0.01 | 0.67 | 0.38 | 0.95 | 363.0 | <0.01 | 0.92 |
| 5 にくらしい－かわいらしい | 1.10 | 1.24 | 6.79 | 57 | <0.01 | 0.89 | 0.58 | 1.19 | 674.0 | <0.01 | 0.92 |
| 10 恥しらずの－恥ずかしの | 0.64 | 0.99 | 4.93 | 57 | <0.01 | 0.65 | 0.36 | 0.93 | 380.5 | <0.01 | 0.87 |
| 14 感じのわるい－感じのよい | 0.53 | 0.88 | 4.60 | 58 | <0.01 | 0.60 | 0.32 | 0.87 | 393.0 | <0.01 | 0.81 |
| 27 不幸な－しあわせな | 0.49 | 1.02 | 3.69 | 58 | <0.01 | 0.48 | 0.21 | 0.75 | 246.0 | <0.01 | 0.78 |
| 12 沈んだ－うきうきした | 0.63 | 1.08 | 4.46 | 58 | <0.01 | 0.58 | 0.30 | 0.85 | 521.5 | <0.01 | 0.75 |
| 26 快い－不快な | -0.41 | 0.79 | -3.95 | 58 | <0.01 | 0.51 | 0.24 | 0.78 | 44.0 | <0.01 | 0.75 |
| 3 なまいきでない－なまいきな | -0.71 | 1.20 | -4.54 | 58 | <0.01 | 0.59 | 0.31 | 0.87 | 75.0 | <0.01 | 0.75 |
| 6 心のひろい－心のせまい | 0.37 | 0.79 | 3.65 | 58 | <0.01 | 0.47 | 0.20 | 0.74 | 239.0 | <0.01 | 0.73 |
| 22 陰気な－陽気な | 0.47 | 1.02 | 3.56 | 58 | <0.01 | 0.46 | 0.19 | 0.73 | 281.0 | <0.01 | 0.73 |
| 23 優れた－劣った | -0.49 | 1.09 | -3.47 | 58 | <0.01 | 0.45 | 0.18 | 0.72 | 45.5 | <0.01 | 0.72 |
| 24 正しい－間違った | -0.36 | 1.00 | -2.75 | 58 | 0.01 | 0.36 | 0.09 | 0.62 | 26.5 | 0.01 | 0.69 |
| 8 責任感のある－責任感のない | 0.39 | 0.95 | 3.16 | 58 | <0.01 | 0.41 | 0.14 | 0.68 | 347.5 | <0.01 | 0.60 |
| 15 分別のある－無分別な | 0.41 | 0.92 | 3.43 | 57 | <0.01 | 0.45 | 0.18 | 0.72 | 421.5 | <0.01 | 0.60 |
| 9 軽率な－慎重な | 0.54 | 1.22 | 3.41 | 58 | <0.01 | 0.44 | 0.17 | 0.71 | 547.0 | <0.01 | 0.56 |
| 7 非社交的な－社交的な | -0.53 | 1.19 | -3.38 | 58 | <0.01 | 0.44 | 0.17 | 0.71 | 173.5 | <0.01 | 0.56 |
| 21 美しい－醜い | -0.39 | 1.05 | -2.85 | 58 | 0.01 | 0.37 | 0.11 | 0.63 | 91.5 | 0.01 | 0.55 |
| 4 ひとつっこい－近づきたい | -0.51 | 1.21 | -3.23 | 58 | <0.01 | 0.42 | 0.15 | 0.69 | 226.5 | <0.01 | 0.50 |
| 1 積極的な－消極的な | 0.36 | 1.14 | 2.43 | 57 | 0.02 | 0.32 | 0.05 | 0.58 | 381.5 | 0.03 | 0.45 |
| 20 不親切な－親切な | 0.25 | 0.99 | 1.97 | 58 | 0.07 | 0.26 | 0.00 | 0.51 | 317.0 | 0.08 | 0.36 |
| 19 気長な－短気な | 0.31 | 1.15 | 2.04 | 58 | 0.06 | 0.27 | 0.00 | 0.52 | 450.0 | 0.07 | 0.35 |
| 17 無気力な－意欲的な | 0.21 | 1.06 | 1.49 | 57 | 0.16 | 0.20 | -0.06 | 0.46 | 282.0 | 0.17 | 0.30 |
| 11 重厚な－軽薄な | -0.07 | 0.93 | -0.56 | 58 | 0.65 | 0.07 | -0.18 | 0.33 | 112.0 | 0.70 | 0.11 |
| 13 堂々とした－卑屈な | -0.03 | 0.89 | -0.29 | 58 | 0.80 | 0.04 | -0.22 | 0.29 | 139.0 | 0.76 | 0.07 |
| 16 親しみやすい－親みにくい | -0.05 | 1.04 | -0.38 | 58 | 0.76 | 0.05 | -0.21 | 0.30 | 276.0 | 0.75 | 0.07 |
| 18 自信のない－自信のある | 0.02 | 1.04 | 0.13 | 58 | 0.90 | 0.02 | -0.24 | 0.27 | 252.0 | 0.93 | 0.02 |

注) M が正の値のときには右側の語、負の値のときには左側の語に態度が偏っていることを意味する。p 値はBH法を用いて補正した有意確率を表す。四分位数は多くの項目で同一であるため表記を省略した。

定型発達児に対する顕在的態度

表 3 は定型発達児に対する顕在的態度をニュートラルから離れている順に並べたものである。28 項目中、有意にポジティブであったのは 23 項目で、有意にネガティブであった項目はなかった。なお、「13.堂々とした—卑屈な」は対応のある *t* 検定と Wilcoxon の符号順位検定で異なる検定結果となったが、この項目は非有意とみなした。

表 3 定型発達児に対する顕在的態度の中間点との比較

| 項目 | 対応のある <i>t</i> 検定 | | | | | Wilcoxon の符号順位検定 | | | | | |
|------------------|-------------------|-----------|----------|-----------|----------|------------------------------|---------|---------|----------|----------|------------------------------|
| | <i>M</i> | <i>SD</i> | <i>t</i> | <i>df</i> | <i>p</i> | 効果量 | | | <i>W</i> | <i>p</i> | 効果量 <i>r_{sb}</i> |
| | | | | | | Cohen's <i>d_z</i> | 95%CI下限 | 95%CI上限 | | | |
| 5 にくらしい—かわいらしい | 0.95 | 1.03 | 7.18 | 58 | <0.01 | 0.93 | 0.63 | 1.24 | 561.0 | <0.01 | 1.00 |
| 10 恥しらずの—恥ずかしの | 0.45 | 0.71 | 4.83 | 58 | <0.01 | 0.63 | 0.35 | 0.91 | 231.0 | <0.01 | 1.00 |
| 14 感じのわるい—感じのよい | 0.81 | 0.86 | 7.26 | 58 | <0.01 | 0.95 | 0.64 | 1.25 | 630.0 | <0.01 | 1.00 |
| 28 おろかな—かしこい | 0.66 | 0.86 | 5.88 | 58 | <0.01 | 0.77 | 0.47 | 1.05 | 378.0 | <0.01 | 1.00 |
| 27 不幸な—しあわせな | 0.83 | 1.04 | 6.16 | 58 | <0.01 | 0.80 | 0.50 | 1.09 | 487.0 | <0.01 | 0.96 |
| 12 沈んだ—うきうきした | 0.85 | 0.94 | 6.90 | 58 | <0.01 | 0.90 | 0.59 | 1.20 | 645.0 | <0.01 | 0.94 |
| 2 人のわるい—人のよい | 0.52 | 0.84 | 4.67 | 57 | <0.01 | 0.61 | 0.33 | 0.89 | 267.0 | <0.01 | 0.93 |
| 6 心のひろい—心のせまい | -0.36 | 0.71 | -3.83 | 58 | <0.01 | 0.50 | 0.23 | 0.77 | 6.5 | <0.01 | 0.92 |
| 17 無気力な—意欲的な | 0.90 | 1.10 | 6.31 | 58 | <0.01 | 0.82 | 0.52 | 1.11 | 637.5 | <0.01 | 0.91 |
| 22 陰気な—陽気な | 0.78 | 1.05 | 5.70 | 58 | <0.01 | 0.74 | 0.45 | 1.03 | 583.0 | <0.01 | 0.85 |
| 20 不親切な—親切な | 0.56 | 0.79 | 5.41 | 58 | <0.01 | 0.70 | 0.42 | 0.99 | 487.5 | <0.01 | 0.85 |
| 21 美しい—醜い | -0.51 | 0.95 | -4.10 | 58 | <0.01 | 0.53 | 0.26 | 0.80 | 25.5 | <0.01 | 0.83 |
| 26 快い—不快な | -0.61 | 0.91 | -5.15 | 58 | <0.01 | 0.67 | 0.39 | 0.95 | 57.5 | <0.01 | 0.81 |
| 9 軽率な—慎重な | 0.37 | 0.76 | 3.75 | 58 | <0.01 | 0.49 | 0.22 | 0.76 | 226.0 | <0.01 | 0.79 |
| 7 非社交的な—社交的な | 0.54 | 0.93 | 4.46 | 58 | <0.01 | 0.58 | 0.30 | 0.85 | 438.5 | <0.01 | 0.77 |
| 18 自信のない—自信のある | 0.44 | 0.86 | 3.95 | 58 | <0.01 | 0.51 | 0.24 | 0.78 | 309.0 | <0.01 | 0.76 |
| 16 親しみやすい—親しみにくい | -0.76 | 1.22 | -4.79 | 58 | <0.01 | 0.62 | 0.34 | 0.90 | 133.5 | <0.01 | 0.70 |
| 25 うそつきな—正直な | 0.39 | 0.86 | 3.37 | 58 | <0.01 | 0.44 | 0.17 | 0.70 | 272.5 | <0.01 | 0.68 |
| 15 分別のある—無分別な | -0.34 | 0.83 | -3.37 | 58 | <0.01 | 0.44 | 0.17 | 0.70 | 66.0 | <0.01 | 0.65 |
| 4 ひとつつつこい—近づきたい | -0.56 | 1.10 | -3.90 | 58 | <0.01 | 0.51 | 0.23 | 0.78 | 112.0 | <0.01 | 0.64 |
| 1 積極的な—消極的な | -0.34 | 0.95 | -2.77 | 58 | 0.01 | 0.36 | 0.10 | 0.62 | 84.0 | 0.01 | 0.60 |
| 11 重厚な—軽薄な | -0.17 | 0.59 | -2.20 | 58 | 0.04 | 0.29 | 0.02 | 0.55 | 21.0 | 0.04 | 0.56 |
| 23 優れた—劣った | -0.31 | 1.06 | -2.22 | 58 | 0.04 | 0.29 | 0.03 | 0.55 | 67.5 | 0.03 | 0.51 |
| 13 堂々とした—卑屈な | -0.20 | 0.74 | -2.12 | 58 | 0.04 | 0.28 | 0.01 | 0.53 | 69.5 | 0.06 | 0.45 |
| 24 正しい—間違った | -0.19 | 0.86 | -1.66 | 58 | 0.11 | 0.22 | -0.04 | 0.47 | 42.0 | 0.10 | 0.45 |
| 8 責任感のある—責任感のない | -0.15 | 0.87 | -1.35 | 58 | 0.20 | 0.18 | -0.08 | 0.43 | 173.0 | 0.20 | 0.26 |
| 19 気長な—短気な | 0.07 | 0.81 | 0.65 | 58 | 0.54 | 0.08 | -0.17 | 0.34 | 98.0 | 0.57 | 0.15 |
| 3 なまいきでない—なまいきな | -0.08 | 1.02 | -0.64 | 58 | 0.53 | 0.08 | -0.17 | 0.34 | 165.0 | 0.57 | 0.13 |

注) *M* が正の値のときには右側の語、負の値のときには左側の語に態度が偏っていることを意味する。*p* 値は BH 法を用いて補正した有意確率を表す。四分位数は多くの項目で同一であるため表記を省略した。

ASD 傾向児に対する顕在的態度と定型発達児に対する顕在的態度の比較

表4はASD傾向児と定型発達児に対する顕在的態度の差を効果量の大きい順に並べたものである。有意差は28項目中13項目でみられ、「6.心のひろい—心のせまい」「7.非社交的な—社交的な」「15.分別のある—無分別な」「17.無気力な—意欲的な」「16.親しみやすい—親しみにくい」「8.責任感のある—責任感のない」「1.積極的な—消極的な」「27.不幸な—しあわせな」「14.感じのわるい—感じのよい」「18.自信のない—自信のある」の10項目はASD傾向児のほうが有意にネガティブに評価されていた。一方、「25.うそつきな—正直な」「3.なまいきでない—なまいきな」「2.人のわるい—人のよい」の3項目に関してはASD傾向児のほうが有意にポジティブに評価されていた。

表 4 ASD 傾向児に対する顕在的態度と定型発達児に対する顕在的態度の差

| 項目 | 差得点 | | 対応のあるt検定 | | | | | Wilcoxonの符号順位検定 | | | |
|------------------|-------|------|----------|----|-------|-------------------------------|---------|-----------------|-------|-------|------------------------------|
| | M | SD | t | df | p | 効果量 | | | W | p | 効果量 <i>r_{nb}</i> |
| | | | | | | Cohen's <i>d</i> _z | 95%CI下限 | 95%CI上限 | | | |
| 6 心のひろい—心のせまい | 0.73 | 0.94 | 5.93 | 58 | <0.01 | 0.77 | 0.48 | 1.06 | 0.0 | <0.01 | 1.00 |
| 7 非社交的な—社交的な | -1.07 | 1.46 | -5.62 | 58 | <0.01 | 0.73 | 0.44 | 1.02 | 720.0 | <0.01 | 0.85 |
| 25 うそつきな—正直な | 0.79 | 1.13 | 5.28 | 56 | <0.01 | 0.70 | 0.41 | 0.99 | 69.0 | <0.01 | 0.80 |
| 15 分別のある—無分別な | 0.76 | 1.19 | 4.86 | 57 | <0.01 | 0.64 | 0.35 | 0.92 | 82.0 | <0.01 | 0.75 |
| 17 無気力な—意欲的な | -0.69 | 1.35 | -3.88 | 57 | <0.01 | 0.51 | 0.23 | 0.78 | 374.0 | <0.01 | 0.72 |
| 16 親しみやすい—親しみにくい | 0.71 | 1.44 | 3.80 | 58 | <0.01 | 0.50 | 0.22 | 0.76 | 114.5 | <0.01 | 0.66 |
| 3 なまいきでない—なまいきな | -0.63 | 1.50 | -3.22 | 58 | 0.01 | 0.42 | 0.15 | 0.68 | 333.5 | <0.01 | 0.64 |
| 8 責任感のある—責任感のない | 0.54 | 1.18 | 3.53 | 58 | <0.01 | 0.46 | 0.19 | 0.73 | 120.0 | <0.01 | 0.62 |
| 27 不幸な—しあわせな | -0.34 | 0.94 | -2.77 | 58 | 0.02 | 0.36 | 0.10 | 0.62 | 242.5 | 0.02 | 0.62 |
| 14 感じのわるい—感じのよい | -0.29 | 0.79 | -2.81 | 58 | 0.02 | 0.37 | 0.10 | 0.63 | 219.5 | 0.02 | 0.59 |
| 1 積極的な—消極的な | 0.71 | 1.58 | 3.41 | 57 | <0.01 | 0.45 | 0.18 | 0.72 | 181.5 | <0.01 | 0.56 |
| 2 人のわるい—人のよい | 0.45 | 1.16 | 2.95 | 57 | 0.01 | 0.39 | 0.12 | 0.65 | 118.0 | 0.01 | 0.55 |
| 18 自信のない—自信のある | -0.42 | 1.28 | -2.55 | 58 | 0.03 | 0.33 | 0.07 | 0.59 | 484.5 | 0.03 | 0.46 |
| 20 不親切な—親切な | -0.31 | 1.04 | -2.26 | 58 | 0.06 | 0.29 | 0.03 | 0.55 | 331.5 | 0.07 | 0.43 |
| 22 陰気な—陽気な | -0.31 | 1.16 | -2.01 | 58 | 0.09 | 0.26 | 0.00 | 0.52 | 345.0 | 0.09 | 0.39 |
| 26 快い—不快な | 0.20 | 1.01 | 1.54 | 58 | 0.23 | 0.20 | -0.06 | 0.46 | 135.0 | 0.10 | 0.38 |
| 12 沈んだ—うきうきした | -0.22 | 1.15 | -1.48 | 58 | 0.24 | 0.19 | -0.45 | 0.07 | 287.5 | 0.19 | 0.32 |
| 13 堂々とした—卑屈な | 0.17 | 0.91 | 1.43 | 58 | 0.25 | 0.19 | -0.07 | 0.44 | 136.0 | 0.25 | 0.28 |
| 19 気長な—短気な | 0.24 | 1.29 | 1.41 | 58 | 0.24 | 0.18 | -0.07 | 0.44 | 203.0 | 0.23 | 0.28 |
| 10 恥しらずの—恥ずかしがりの | 0.19 | 1.12 | 1.30 | 57 | 0.28 | 0.17 | -0.09 | 0.43 | 204.0 | 0.24 | 0.27 |
| 11 重厚な—軽薄な | 0.10 | 1.00 | 0.79 | 58 | 0.47 | 0.10 | -0.15 | 0.36 | 100.5 | 0.31 | 0.27 |
| 24 正しい—間違った | -0.17 | 1.19 | -1.09 | 58 | 0.37 | 0.14 | -0.40 | 0.12 | 131.0 | 0.40 | 0.25 |
| 21 美しい—醜い | 0.12 | 0.98 | 0.93 | 58 | 0.42 | 0.12 | -0.14 | 0.38 | 111.5 | 0.45 | 0.19 |
| 5 にくらしい—かわいらしい | 0.16 | 1.36 | 0.87 | 57 | 0.44 | 0.11 | -0.15 | 0.37 | 201.0 | 0.40 | 0.19 |
| 9 軽率な—慎重な | 0.17 | 1.39 | 0.94 | 58 | 0.43 | 0.12 | -0.14 | 0.38 | 271.0 | 0.38 | 0.19 |
| 23 優れた—劣った | -0.19 | 1.42 | -1.01 | 58 | 0.40 | 0.13 | -0.39 | 0.13 | 187.0 | 0.54 | 0.15 |
| 28 おろかな—かしこい | 0.07 | 1.11 | 0.47 | 58 | 0.66 | 0.06 | -0.20 | 0.32 | 146.5 | 0.68 | 0.10 |
| 4 ひとつつつこい—近づきたい | 0.05 | 1.77 | 0.22 | 58 | 0.83 | 0.03 | -0.23 | 0.28 | 418.5 | 0.68 | 0.07 |

注) MはASD傾向児に対する態度と定型発達児に対する態度の差の平均得点で、正の値のときには右側の語、負の値のときには左側の語にASD傾向児に対する態度が偏っていることを意味する。p値はBH法を用いて補正した有意確率を表す。太字は定型発達児よりもASD傾向児がポジティブに評価された項目を表す。四分位数は多くの項目で同一であるため表記を省略した。

ASD に対する潜在的態度

ASD SC-IAT の得点について Shapiro-Wilk 検定を行ったところ有意ではなかった ($p = 0.81$) ため、得点は正規分布しているとみなした。ASD SC-IAT の平均点は -0.18 ($SD = 0.39$) で、0 を基準とした 1 サンプルの t 検定を実施したところ、ASD-SC-IAT の平均点は 0 よりも有意に低かった ($t(59) = -3.57, p < .01, d = 0.46, 95\%CI [0.19, 0.73]$)。つまり、ASD に対する潜在的態度は全体としてはネガティブであった。

ASD 傾向児との関わりに伴うストレスやレジリエンスと ASD 傾向児への態度の関連

表 5 は ASD 傾向児との関わりにおけるストレスやレジリエンスの記述統計量である。定型発達児に対する顕在的態度を制御変数として、ASD 傾向児に対する顕在的態度と ASD 傾向児との関わりにおけるストレスやレジリエンスの関連を Pearson の偏相関分析および Spearman の偏順位相関分析によって調べた。その結果、ASD 傾向児との関わりにおいて「4.仕事を通じて自分も成長していると感じる」保育教諭ほど ASD 傾向児を「しあわせである (不幸でない)」ととらえ (Pearson の偏相関係数と Spearman の偏順位相関係数はそれぞれ $pr = 0.41, 0.42, ps < .01$)、「6.子どもの成長をみるのが楽しみである」保育教諭ほど ASD 傾向児を「かわいらしい (にくらしくない)」ととらえている ($pr = 0.38, 0.45, ps < .01$) ことがわかった。

ASD SC-IAT の得点は ASD 傾向児との関わりにおけるストレスやレジリエンスと有意な関連を示さなかった ($rs = -0.07—0.24, ps = 0.36—1.00$)。

表 5 ASD 傾向児との関わりにおけるストレスとレジリエンスの記述統計量

| 項目 | <i>n</i> | <i>M</i> | <i>SD</i> | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
|----------------------------------|----------|----------|-----------|------|------|------|------|------|
| 1 心理的負担を感じる S | 59 | 2.54 | 0.93 | 10.2 | 42.4 | 33.9 | 10.2 | 3.4 |
| 2 自分なりにうまくやれていると思う R | 59 | 2.22 | 0.89 | 18.6 | 50.8 | 22.0 | 6.8 | 1.7 |
| 3 無力感がある S | 59 | 1.68 | 1.09 | 64.4 | 15.3 | 11.9 | 5.1 | 3.4 |
| 4 仕事を通じて自分も成長していると感じる R | 59 | 3.42 | 1.12 | 1.7 | 23.7 | 25.4 | 28.8 | 20.3 |
| 5 肉体的負担を感じる S | 59 | 2.47 | 1.09 | 16.9 | 42.4 | 22.0 | 13.6 | 5.1 |
| 6 子どもの成長をみるのが楽しみである R | 59 | 4.27 | 0.83 | 0.0 | 1.7 | 18.6 | 30.5 | 49.2 |
| 7 子どもに必要な援助がわからない S | 59 | 2.78 | 1.00 | 5.1 | 42.4 | 27.1 | 20.3 | 5.1 |
| 8 充実している R | 59 | 2.95 | 1.11 | 8.5 | 27.1 | 35.6 | 18.6 | 10.2 |
| 9 いくら勉強してもうまくやれる気がしない S | 59 | 2.00 | 1.00 | 37.3 | 37.3 | 13.6 | 11.9 | 0.0 |
| 10 多少思いどおりにならなくても楽観的に考えようとしている R | 59 | 3.22 | 1.16 | 6.8 | 23.7 | 23.7 | 32.2 | 13.6 |

注) 項目末尾のSはストレス項目, Rはレジリエンス項目を表す。1は「1.まったくあてはまらない」に回答した人の百分率を表す。2-5についても同様である。

考 察

ASD 傾向児への態度を（定型発達児と比較するのではなく）中間点と比較した場合には、28 項目中 16 項目でポジティブであった（表 2）。一方、ASD SC-IAT の得点は中間点である 0 よりも有意に低く、潜在的態度はネガティブであった。その効果量も $d = 0.46$ とそれなりに大きな値であった。まとめると、中間点との比較では顕在的態度はポジティブであったが潜在的態度はネガティブであり、顕在・潜在間にギャップがみられた。このことは、顕在的態度が社会的望ましさの影響を受けて全体的にポジティブな方向に偏った可能性があることを示唆している。ただし、本研究において顕在的態度を測定するために用いた形容詞と ASD SC-IAT で用いた形容詞は完全には一致していないため、顕在的態度と潜在的態度をより直感的に比較するためには刺激語を統一して検討する必要がある。

表 4 のとおり、定型発達児と比較したとき、保育教諭は 28 項目中 10 項目で ASD 傾向児をネガティブにとらえていた。特に差の大きかった項目は ASD の特性をよく反映しているものであった。具体的には「心のせまい」はこだわり、「非社会的な」は社会性の問題、「無分別な」は想像力の問題を反映している。また、注目すべきことに、「無気力な」「不幸な」「自信のない」「感じのわるい」といった ASD の特性とは直接関係のない語においても ASD 傾向児は定型発達児よりもネガティブに評価されていた。これらとは反対に ASD 傾向児のほうがポジティブに評価された項目もあり、保育教諭は ASD 傾向児を定型発達児よりも「正直な」「なまいきでない」「人のよい」ととらえていた。「正直な」は想像力の問題、「なまいきでない」は社会性の問題がポジティブな方向に発揮されたときを示唆している。「人のよい」という ASD の特性とは直接関係のない語においても ASD 傾向児はポジティブに評価されていたが、そのような項目はひとつにとどまった。

以上をまとめると、全体的には保育教諭のもつ ASD 傾向児に対する態度は定型発達児に対するそれよりもネガティブであるといえるが、以下に述べるように、保育や教育のあり方によって ASD 傾向児に対する態度が異なる可能性も示唆されている。

ASD 傾向児との関わりに伴うストレスやレジリエンスと ASD 傾向児への態度の関連については一部に有意な相関がみられ、「仕事を通じて自分も成長していると感じる」保育教諭ほど ASD 傾向児を「しあわせである」ととらえ、「子どもの成長をみるのが楽しみである」保育教諭ほど ASD 傾向児を「かわいらしい」ととらえていた。ASD を単なる障害ととらえず、そこに子どもや自分自身の成長の可能性を見出すことが ASD 傾向児へのポジティブな態度につながるのかもしれない。堀田他(2013)は、特別な配慮を要する子どもの強みやレジリエンスを発見し、それを子どもや保護者に伝えることが重要であると指摘しているが、本研究の結果はこれを支持するものである。

本研究の限界として、国外の類似した先行研究(Chung et al., 2015, Flood et al., 2013, Olley et al., 1981)では特別支援学校教諭とそうでない者の比較分析を行っているが、本研究では保育教諭のみを対象としている。今後は、保育教諭に加えて ASD 傾向児の保育や教育に携わっていない者も対象として調査を行い、先行研究の結果と比較することが課題である。

引用文献

- 赤田 太郎 (2010). 保育士ストレス評定尺度の作成と信頼性・妥当性の検討 心理学研究, *81*, 158-166.
- Allport, G. W. (1955). *The nature of prejudice*. Cambridge, Massachusetts: Addison-Wesley Publishing Company.
- Benjamini, Y. & Hochberg, Y. (1995). Controlling the false discovery rate: a practical and powerful approach to multiple testing. *Journal of the Royal Statistical Society, Series B*, *57*, 289-300.
- Chung, W., Chung, S., Edgar-Smith, S., Palmer, R. B., Delambo, D., & Huang, W. (2015). An examination of in-service teacher attitudes toward students with autism spectrum disorder: Implications for professional practice. *Current Issues in Education*, *18*. Retrieved from <https://cie.asu.edu/ojs/index.php/cieatasu/article/view/1386>
- Edwards, A. (1953). The relationship between the judged desirability of a trait and the probability that the trait will be endorsed. *Journal of Applied Psychology*, *37*, 90-93.
- Flood, L. N., Bulgrin, A., & Morgan, B. L. (2013). Piecing together the puzzle: Development of the Societal Attitudes towards Autism (SATA) scale. *Journal of Research in Special Educational Needs*, *13*, 121-128.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998). Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and Social Psychology*, *74*, 1464-1480.
- Greenwald, A. G., Poehlman, T. A., Uhlmann, E., & Banaji, M. R. (2009). Understanding and using the implicit association test: III. Meta-analysis of predictive validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, *97*, 17-41.
- 林 文俊(1978). 対人認知構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要 (教育心理学科), *25*, 233-247.
- 堀田 千絵・花咲 宣子・堀田 伊久子・十一 元三 (2013). 要配慮児の行動特性及び認知発達の特徴と発達障害リスクとの関係—子どもの強み・レジリエンスを評価することの重要性— 人間環境学研究, *11*, 107-115.
- Karpinski, A., & Steinman, R. B. (2006). The single category implicit association test as a measure of implicit social cognition. *Journal of Personality and Social Psychology*, *91*, 16-32.
- 川村 高弘・庄司 圭子・三木 さち子(2015). 保育者のレジリエンスと保育者効力感の関連 論攷: 神戸女子短期大学紀要, *60*, 9-16.
- 木曾 陽子 (2016). 未診断の発達障害の傾向がある子どもの保育や保護者支援と保育士の心理的負担との関係—バーンアウト尺度を用いた質問紙調査より— 保育学研究, *54*, 67-78.
- 北村 英哉・唐沢 穰 (2018). 偏見や差別やなぜ起こる? 心理メカニズムの解明と減少の分析 ちとせプレス
- McGregor, E. M., & Campbell, E. (2001). The attitudes of teachers in Scotland to the integration

- of children with autism into mainstream schools. *Autism*, 5, 189-207.
- 田実 潔 (2007). 「購読演習」による自閉症イメージ形成の可能性について: 教授法(FD)の観点から
北星学園大学社会福祉学部北星論集, 44, 109-118.
- NHK (2019). 「障害者共生社会に関する世論調査」単純集計結果 retrieved from
https://www.nhk.or.jp/bunken/research/yoron/pdf/20190729_1.pdf
- 西坂 小百合 (2002). 幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレス, ハーディネス, 保育者効力感の影響
教育心理学研究, 50, 283-290.
- 小原 敏郎・武藤 安子 (2005). 「保育の質」と「レジリエンス」概念との関連 日本家政学会誌, 56,
643-651.
- Olley, J. G., DeVellis, R. F., DeVellis, B. M., Wall, A. J., & Long, C. E. (1981). The autism attitude
scale for teachers. *Exceptional Children*, 47, 371-372.
- 佐々木 美恵 (2019). 地震・放射線災害下保育における幼稚園教諭の精神的健康: レジリエンス要因
として保育者効力感に着目した検討 発達心理学研究, 30, 11-22.